

早わかり！ 道徳科の授業作成手順

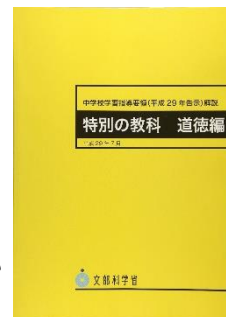
～内容項目「遵法精神、公德心」「二通の手紙」を例にして～

1. 指導内容(内容項目)を確認し、ねらいを検討する……学習指導要領解説を読む



該当の学年だけでなく、小学校低学年から中学校までを見通して、内容項目についての理解を深め、ねらいとする道徳的価値について、授業者の明確な考えをもちましょう。

解説では、(1) 内容項目の概要と(2) 指導の要点が示されています。例えば、「遵法精神、公德心」においては、「法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること」とあります。指導に当たっては、法やきまりは自分自身や他者の権利を守るためにあり、それを遵守することの大切さについての自覚を促すことが求められます。その上で、「ルールだから守る」(他律的な捉え方)から「尊重したいから守る」という自律的な捉え方ができるようにしていくことが大切です。



2. 指導内容(内容項目)やねらいに関わる児童生徒の実態を明らかにする



児童生徒の実態があるからこそ、本時の道徳科の授業では、どの**道徳性の諸様相**に焦点を当てて授業をするのかが決まるのです。

「法やきまりを守る」ことについて、今の生徒の現状を把握します。これまでの教育活動や指導場面を振り返り、その結果として、生徒のよさや課題を確認します。

例えば、「法やきまりは、自分たちを拘束するものと反発し、肯定的に受け止められていない」という実態があるならば、ねらいは、「法やきまりを守ることが、自分たちの社会を安定的なものにしていることを考えさせ、積極的に法やきまりに関わろうとする**態度を育てる**」等が考えられます。

あるいは「周囲に目が向けられず、自己中心的な言動により、きまりが守られていない」という実態があるならば、ねらいは、「法やきまりの意義を理解し、自尊心や思いやりの心との関わりがあることに気付かせ、法やきまりを守ろうとする**判断力を育てる**」等が考えられます。

このように生徒の実態を把握することで、本時で学ばせたいことが明確になってきます。

学校教育における道徳性の捉え方(道徳性の諸様相)

道徳的判断力	それぞれの場面で善悪を判断する能力
道徳的心情	道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪にくむ感情
道徳的実践意欲	道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし、道徳的価値を実現しようとする意志の働き
道徳的態度	道徳的判断力や道徳的心情に裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え

3. 教材を吟味する……児童生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項を検討



読み物教材では、道徳的価値に関わるどんな問題が起きているのか、その出来事に道徳的価値がどのように関わっているのかをとらえ、ねらいに関わって、児童生徒に一番考えさせたい場面を想定し、発問等を考えます。

ねらいとする道徳的価値(遵法精神、公德心)についての、授業者の明確な意図、生徒の実態をもとに、教材「二通の手紙」をどのように活用し、どのような学習を行うのかを明らかにします。

「態度を育てる」ことをねらいとした場合

元さんが、二通の手紙を見比べながら、考えている場面。

「判断力を育てる」ことをねらいとした場合

元さんが、迷った末、姉弟を入園させる場面。

中心発問 二通の手紙を見比べながら、元さんは何を考えていたか。

中心発問 元さんのこの場面での「思いやり」に問題はないのか。

※次ページでは、「態度を育てる」ことをねらいとした学習展開の例を示しています。

4. 学習指導過程を作成する(新大分スタンダードとの関係も含む)

1～3を通して、教師の指導の意図が明確になったところで、授業の指導の流れ(学習指導過程)を考えていきます。

段階		学習活動や主な発問
導入	・児童生徒の興味関心を高め、ねらいとする道徳的価値に向けて動機付けを図る段階	○実態や問題を知る めあて 規則やきまりの大切さについて考えよう
展開	・ねらいを達成するための中心となる段階 ・中心的な教材によって、ねらいとする道徳的価値についてじっくり考える段階 ・ねらいに対する思いや願い、課題を培うために、現在の自分を見つめる(設定しない場合も考えられる)	○教材を活用して道徳的価値を理解し、よりよい生き方を考える 中心発問につなげるための基本発問 元さんは、なぜ規則をやぶってまで入園させたのだろう。 中心発問 二通の手紙を見比べながら、元さんは何を考えていたのでしょうか。 ※生徒の考えを深めたり広げたりする補助発問を準備しておく まとめ ・規則は自分一人のものではないということについて ・先のことを想像することの大切さについて
終末	・ねらいに対する自分なりの思いをあたためたり、更に深く心にとどめたりして、今後の発展につなぐ段階	○よりよい生き方の実現への思いや願いを深める 振り返り 規則やきまりには、どんな意味が込められているのだろう

※学習指導過程にあるめあてや中心発問(課題)、まとめ、振り返り等は、一例です。

ねらい、実態、教材、学習指導過程に応じて、適切な指導方法を選択し、工夫しましょう。

発問の工夫(例)

多面的・多角的な考えを引き出すために、次のような発問が考えられます。

- ◆元さんが言った「この年になって初めて考えさせること」とは、どんなことなのでしょう。
- ◆佐々木さんは、元さんから何を学んだのだろう。
- ◆動物園の規則を守ると「思いやり」を実行できないが、動物園の規則に問題はないのか。
- ◆会社を辞めるのは残念なことなのに、元さんが晴れ晴れとした顔をしていたのはなぜだろう。 など

表現活動の工夫(例)

元さんの言葉「万が一事故にでもなっていたらと思うと・・・」の部分に、役割演技を取り入れ、元さんになりきって表現させる。「規則に込められたあたたかな思いを忘れるなんて、動物園職員として失格です。」や「規則の意味を改めて深く考えることができました」などの発言が期待できる。

5. 本時において、期待する児童生徒の学習状況を明確にする(評価の着眼点)

道徳科の評価は、道徳性が育ったかどうかを評価するものではありません。道徳性につながっていくような学習状況がみられたかどうかを把握します。学習状況とは、道徳科の目標に示されている学習活動における生徒の発言や記述等のことです。本時における期待する学習状況を明確にし、評価の着眼点を設定しましょう。

【ねらいの構造】 ※特に決められた形式はありませんが、次の3つの要素で書くことが考えられます。

「学習の中心的内容」・元さんが姉弟を入園させたことについて

「学習活動」・……きまりの大切さを生命尊重や思いやり等の視点から考えることを通して

「道徳性諸様相」・……きまりを守り、義務を果たそうとする態度を育てる。

ねらいの3つの要素のうち「学習活動」の部分の評価の着眼点にします。

【評価の着眼点】

きまりの大切さを、生命尊重や思いやりと関連付けながら考え、発言したり書いたりしている。

【評価の方法】(いつ、どのようにして)

・グループ学習の様子や全体での発言から見取っていく。(机間指導と意図的指名) ・道徳ノートの記述から見取っていく。

